

『春夜聞笛』 李白

詩人の中の仙人といわれる李白はやはり人間であった

春夜聞笛 李白 春夜笛を聞く 李白

誰家玉笛暗飛聲。誰が家の玉笛か暗に聲を飛ばす

散入春風滿洛城。散じて春風に入りて洛城に満つ

此夜曲中聞折柳。此の夜曲中折柳を聞く

何人不起故園情。何人か起こさざらん故園の情を

「春夜洛城聞笛」が本題であるが関西吟詩では「春夜聞笛」と略した。

大都会洛陽の春の夜、どこからともなく流れてくる笛の音に触発され、郷愁を詠じた名作である。李白三十代後半の作といわれる。

【出典】「唐詩選」

【語意】

玉笛 「玉」は美称 素晴らしい笛またはその笛の音
折柳 「折楊柳の曲」 人を見送る時の楽曲

【意解】

誰の家で吹く玉笛であろうか、どこからともなく美しい旋律が聞こえてくる。それらは折からの春風に乗って、洛陽の町いっぱい満ちわたるようである。

こんな夜、曲の中に折楊柳の曲があったが、この曲を聞けば、だれが故郷を恋い慕う思いを起こさずにいられようか。

洛城とはどんな町

中国では「城」は町である。従って洛城は洛陽の町で、現在の河南省洛陽市。中国五大古都（西安Ⅱ長安、洛陽Ⅱ洛浥、開封Ⅱ汴州、南京Ⅱ金陵、北京Ⅱ幽州）の一つ。周の平王がここに都を移して（紀元前八世紀）以来、三國時



から洛陽と呼ばれていた。黄河の支流洛水の北岸にあるのでこの名がついた。(陽は山の南、川の北を指す)唐代になると長安が都となったがなお東都として発展した。皇帝の豪華な離宮も建造され、また経済的にも繁栄した。日本でいえば京の都に対する奈良の都を想定したらどうだろうか。一説によると人口は百万人を数え、長安に遜色なく文化活動も盛んで多くの文人がこの地を訪れ名作を遺している。関西吟詩採用の詩でいえばA6「辛漸を送る」の(洛陽の親友もし相問はば……)A36「秋思」(洛陽城裏秋風を見る……)B18「興を遣る」(杜鵑聲は散る洛陽の烟……)

代の各王朝が都城とした歴史の深い、古都中の古都である。当時は洛滬と呼ばれていた。また現在の洛陽と近郊ではあるが同地域ではない。すでに戦国時代(紀元前三世紀)

C1「代悲白頭翁」(洛陽城東桃李の花……)など。洛陽はなぜか桃の花と文化と歴史の趣きを感じる。

李白の生涯のうちで洛陽時代はどんな位置にあるのだろうか

李白の伝記は不明な点が多い。まして彼の一千首余りの詩の作られた時代や年齢を知りたいけれど不詳であるといわれる。二十五歳で故郷の成都を辞した説に従っていけば、二十一歳から三十七、三十八歳の十余年間は湖北省を根拠にして江蘇省にも遊び、三十七、三十八歳以後は山西省に赴いたのち山東省に数年住み、四十二歳の時に浙江省に行き、同じ年天子に召されて長安に行き、……」(岩波書店・中国詩人選集)とある。残念ながら肝心の洛陽時代が抜け落ちている。湖北省では安陸という町に逗留し結婚もしている。かの名作「静夜思」もここでの作で、三十一歳ころともある。その後三十八歳ころ安陸を離れ(三十五歳ころの説有り)山西省太原地方を旅行し、任城(現山東省済寧市)に住んで、ここで新たに妻を迎え一男一女をもうけている。(大修館)

四十二歳に当時の著名詩人・賀知章によって推挙され、玄宗皇帝の側近に迎えられたというのはどの解説書にもあるのでこれは確かな事実と考えていい。ただ入京したのがこの年かどうかは定かでない。あくまで推察だが、任城で

は新家庭を持って子を得たのだから数年は滞在したであろう。また長安に入るやいなや朝廷からお召しがあるとも考えないので四十二歳以前に都に入って活動していたのではないかと想像しているうち、長安に入る前に浙江省に遊んでいたとの解説があつて（中国詩人選集）、そんな短期間に山東省から南の浙江省に行き、そしてとんぼ返りで北の陝西省長安に行ったのだろうか。いくら読んでも信じがたい行動である。そしてどの書物にも洛陽時代の説明がない。再び想像するに、李白にとつて長安は目的の土地だが洛陽は通過地点程度であつたのだろう。長安に入る前たまたま洛陽に数日留まり、ふと故郷のことがよみがえつて、この「春夜聞笛」の詩が生まれたのではないかと。いずれにしても不明だらけの彼の前半生である。

【鑑賞】

李白は奇人か人間か

前述のとおりこの詩は三十一歳（三十四〜三十五歳説もある）のころのものとすれば、作者はまだ長安に赴かない頃の作である。筆者が勝手に想像しながら鑑賞するのをお許し願いたい。入京を前に不安の毎日であつたらう。博徒の青年が志を抱いて故郷の成都を出発したのち、一時は山にこもつて仙人のように離俗したかと思うと、広大な中国を北へ行つたり南に行つたり流浪の旅に出る。その目的

は不明だが放浪生活を自ら進んで送っている。また当時の秀才なら誰でも目指す科挙の試験に一度も臨むようなこともなく、妻は四人を数える。長安に入り、時の高官である賀知章によつてその詩才を認められ、玄宗皇帝の側近にまでたどり着きながら二年ほどで退散してしまふ。まだまだある。まったく掴みどころのない並外れた性格の逸人である。言葉が不適當かもしれないが、奇人変人といわれてもさもありなんである。

その彼がこの洛陽で望郷の涙を流している。故郷を出るときおそらく折楊柳の曲に乗つて親族や友人に送られたのであろうが、曲折の前半生の中でその思いはどかかにか覆われていたのだろう。ところが洛陽では思いのほか静かな日々があつて、誰かが吹く曲の中に自分が別れの際に奏してもらつたあの曲が流れ始めると、今まで忘れていたか抑えていた望郷の思いが、霧の中に満月を見つけたように蘇つたのであろう。四川省の山や川、家族や友人とともに粗暴で人々から煙たがられた青年時代の自分を思い出したに違いない。こみ上げてくるものを抑えきれない。これこそ奇人変人の李白が普通の人間に戻つた一瞬である。そういう彼の生涯を知つて初めて、私たちは天才詩人李白にこよなく惹かれるのである。この思いは、詠われた時代は違ふけれど、あの「静夜思」とともに味わいたいものである。